

現代中国における「早期教育」の隆盛は家族・ジェンダーをどのように変容させるのか —新たな父親像の出現に着目して—

磯部 香*・黄 一峰**

1. はじめに

現在、東アジア社会一帯は深刻な少子高齢化社会に突入している。そのため子育てや介護（ケア）をどのようにしていくかが、国の最重要課題のひとつとなっており、さまざまな政策を実施し始めている。その中でも隣国中国においては、1979年から続いた人口抑制政策である計画生育政策「一人っ子政策」を2016年に完全撤廃し、どの夫婦も2人子どもを持てる「二人っ子政策」に舵を切った。これは持続的な経済発展及び、今後の高齢社会¹⁾に向けての布石であるが、その効果に関してはさまざまな見解がある。

『日本経済新聞』²⁾によれば、国家衛生計画生育委員会は二人っ子政策の実施によって出生数は2千万人を超すと試算しており、2016年には出生数は1999年以来の高水準で1,786万人であったが、2017年には1,723万人へと減少した。その要因として常に結びつけられて考えられているのは、子どもの教育費の高さである。一人でも子どもを養うのにお金がかかるのに2人を望むのは難しいという声が上がっている。それを裏付けるように新浪教育・新浪微博数据中心『中国家庭教育消費白皮書』(2017)³⁾によれば、子どもにかかる教育費は世帯収入の20%以上を占めている。高

い教育支出が負担であると思いつつも、それでも29%の保護者は教育費を捻出する傾向にあり、40%以上の保護者が毎年子どものために5,000元以上支出している⁴⁾。これは中華圏の特徴とも言えるであろうが、学問や学歴を重視するため親は子どもの教育に対し惜しみなく資源を与える傾向にある。目下、経済改革・開放による経済発展の中で家族も「消費社会」の洗礼を受け、子どもの価値の高まりが家計にも反映されるのである。

その象徴ともいえるべき存在が「早期教育（早教：zǎo jiào）」である。「早期教育」は中国の経済成長がめざましくなった2000年代以降、特に2010年以降になってから驚異的な成長を遂げ中国全土に浸透し、もはや発展した都市部においては「早期教育」に通うのが一般化していると言っても過言ではない状況にある。「早期教育」については後で詳細を述べるが、胎教から3歳（或いは6歳）の子どもとその親を対象とし、「科学的知」・理論に基づいた乳幼児の脳開発、芸術等の才能の開花、心身の発達を目的とした幼児教室である。2016年の早期教育・幼児教育市場規模は6,800億元に達し、国家も約2,800億元の予算を投入している。また家庭の保育・教育支出は約4,000億元に上っていることから分かるように一大急成長産業となっている（中

* 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究中心特任助教、2017/18年度客員研究員

** 大連外国語大学日本語学院専任講師、共同研究者

国産業情報網『2017年中国早教幼教行業發展現狀及發展前景分析』)。

以上のような状況から、筆者らは改革開放以来の中国の著しい経済発展と「一人っ子政策」が複雑に絡み合いながら、家族観、特に子ども観を大きく変容させていると推察している。現在、約 37 年間続いた「一人っ子政策」によって「小皇帝」と揶揄され、比較的豊かな時代に生まれ、「応試教育」と「素質教育」の薫陶を受けた一人っ子世代、「80 后後 (80 年代生まれ)」、「90 后後 (90 年代生まれ)」が結婚し、すでに家族を形成している。このことから現在の中国における家族・ジェンダー構造は新たな局面を迎えているのは確かである。

そこで本研究では、幼児教育の一部分である早期教育が現代中国の家族・ジェンダー構造に何をもたらそうとしているのか、その変容の一端を、乳幼児を持つ父親を調査対象として明らかにしたいと考えている。その理由としては、従前の中国を含めた東アジア社会における家族・ジェンダー研究では、家族やジェンダーを捉える際にはまず母親に着目する傾向があったからだ。そのため母親研究に関してはかなりの蓄積があると言ってよい。一方、特に中国において父親が家族や子育てにどのようにコミットしようとしているのかについてはまだ解明段階の途中にある。現代中国における幼児教育、及び早期教育の浸透が父親たちの父親意識や自らの価値をどのように捉えているのかを理解することで、最近の中国の幼児教育熱が中国の家族・ジェンダー構造をどのように変容させようとしているのか、その片鱗を明らかにすることができる。これが本研究の目的である。

2. 中国の家族・ジェンダー構造

(1) 中国の家族の特徴と専業主婦—「専業主母」の誕生

中国の家族・ジェンダーの特徴に関しては、宮坂靖子の「中国の育児—ジェンダーと親族ネットワークを中心に—」(2007)に詳細が論及されている。宮坂らによる 2003 年の家族調査によると、中国家族の特徴は夫婦共働きが一般的で夫婦の家事分担も比較的公平に行われていること、さらに夫方妻方の祖父母が孫育てのサポート役割を担うことに積極的であり、「修正拡大家族」の形態を取っている点にあった。育児不安や育児ストレスとは無縁であり、「三歳児神話」は見受けられなかった。その一方で 2000 年前半に経済発展著しい沿岸部の富裕層の中には自発的に「専業主母」となり、早期教育に専念する女性たちが中国に登場し始めていることにも言及している。

その 10 年後の 2013 年に宮坂 (2015) は大連市において専業主婦にインタビュー調査を行い、中国における専業主婦の特徴を継続調査によって炙り出した。この調査結果で分かったのは、自らを専業主婦だと思っていないこと、専業主婦でなく自らの手で子育てを行う母親＝「専業主母」というアイデンティティへ自身を位置づけていることである。また「専業主母」らは自らの手で子育てを行ってはいないが子育てを外部的にすることは抵抗感がない。「母親は一種の職業である」とみなすことで就労に価値を置くアイデンティティを保持する戦略をとっていることも明らかになった。この 10 年間で専業主婦化現象は地方都市においても見られ、専業主婦よりもむしろ「専業主母」であることで子どもの子育てや教育に熱心な母親であろうとする役割に重きを置いている女性たちの存在が見受けられる

ようになったのである。

(2) 家族・ジェンダー—性別役割分業規範

一方、鄭楊 (2016) は「経済的役割」と「良妻賢母的役割」の側面から中国の主婦を捉えようと試みている。鄭は主婦やその家族に対するインタビュー調査結果により、主婦らは自らを下記のように意味づけていると言う。

自分の価値を評価する際に、日常的に担っている良妻賢母的役割を、経済的役割より低い位置に置いている傾向がみられる。… 新中国政府は男女平等を実現するために、女性に男性と同等の就業機会を与えると同時に、男性と同様の仕事ぶりも女性に期待したし、それは効率を優先する市場経済時代ではなおさらであった。しかし、家庭内の役割分担については男女平等の性別役割分業規範が再編されず、依然として良妻賢母規範が女性の第一用務として期待されるだけでなく、公領域と私領域の間で二つの役割のどちらを優先するかという選択を常に迫られている (鄭 2016 : 171-172)

総じて言えば「家庭の人」よりも「社会の人」であることに対し社会的価値を置く意識を主婦自身が内面化していることで、主婦という存在に矛盾を感じながらも良妻賢母的役割を遂行しているのである。前述を踏まえれば、就労している母親たちは新中国政府の理想像にかなっており社会的地位は得てはいるものの、仕事も家事・子育てもという二重負担を抱え込まなくてはならない状態にあるのである。

鄭と同様に宮坂 (2007) も指摘しているが、公的領域において比較的ジェンダー平等な中国においても私的領域では性別役割

分業規範が残存し、また新たな形に変容して生成されているのである。現在、中国において性別に基づく役割規範が中国において薄まっていったのではなく、むしろ市場経済の発展によって私的領域に女性役割意識を生成できる素地をつくったとも解釈できる。

上記に加え、宮坂が指摘する子育ての外部化・市場化は、家事や子育てを家まで来てサポートしてくれる「家政婦」、「阿姨 : āyí」や、ベビーシッター「保姆 : bǎomǔ」と呼ばれるケア専門の女性たちを生み出している。私的領域においてサポートしてくれることで女性 (母親) たちは家事やケアの負担から開放されているように見える。しかし、その「家政婦」、「阿姨」、「保姆」に従事しているのはほとんどが女性である。ケアの外部化・市場化によっても、家庭が女性の領域として再編されている。つまり、昨今の目覚ましい中国の経済発展は、中国女性が家庭領域の主体者であることを認識させ、さらに女性たちに仕事と家庭の二重負担を背負わせ、女性は仕事と家庭、男性は仕事という新性別役割分業規範もたらされる可能性を秘めているのである。

そうであるならば、本研究の中核の問いをなす、男性 (父親) の役割は、特に家庭内においてどのように変容していくのだろうか。日本の近代家族が経済急成長期であった高度経済成長期に大衆化 (落合 2004) した時のように、中国の父親たちは、専ら稼ぎ手として経済的役割のみに特化し、子育てや教育が母親役割に収斂されていくのだろうか。また、男性不在の家庭が中国においても生成されていくのだろうか。上記の父親に対する問いは、中国の家族・ジェンダー研究において新たな視角であるため、まだ解明されているとはいえない。そこで本研究の調査においてこれを

解明したいと考えている。

以下、3. より、中国の子どもたちを取り巻く中国特有の教育環境そして幼児教育・早期教育の実情について既存研究、及び統計を用いて明らかにする。

3. 子どもたちを取り巻く教育環境

(1) 激化する子どもたちの競争—「不要讓孩子輸在起跑線上」

2012 年頃に「不要讓孩子輸在起跑線上 (我が子をスタート地点で負けさせない)」という言葉が流行した。これは元々、鄭思奮 (2002, 民主与建設出版社) が執筆した書籍のタイトルであり、幼稚園を含めた学校選択において我が子が他の子に負かされたくないと思う親の心理を表している。しかしこのスタートは教育環境の良い幼稚園に入らせたいという意識だけでなく、教育を施す最初の時点で出遅れたくないという競争意識が背後に存在している。子どもへ施す教育もまた早ければ早いほどよいと考えられており、現代において優れた早期教育の教室に通わせることも競争のひとつになっている。

なぜこのように教育における競争が低年齢化し激化したのか、その問いの答えのひとつは「一人っ子政策」に起因している。約 37 年にわたる「一人っ子政策」によって、子どもを産み育てることは大部分の人々にとって一度きりとなっている。そのため子どもの価値が相対的に高まり、子どもに付随する行為、子育て・教育もまた高い価値を付与されることになった。

このような子どもの価値の高まりは保護者による過保護・過干渉＝「小皇帝」化という問題も引き起こした。楊春華 (2018) によると「四、二、一っ子」家族 (4 人の祖父母、両親、子ども) が、子どもを甘や

かし、勉強だけしかできない状態を作り上げてしまったという。溺愛されている子どもたちの問題がメディアで取り上げられ、それが常態化している。また溺愛は同時に親の過度な期待や呪縛からいつまでも逃れられないことと裏表となっている。子どもたちは役割期待がうまく遂行できないことで慢性的なストレスを抱えている。親たちが子どもに最も期待すること、それは勉強ができることである。この勉強とは将来の大学進学⁽⁵⁾のためのものであり、学歴神話がある社会であるがゆえに、小さい頃からそれに向かって猛烈に勉強するのが彼らの日課となり、その日々のストレスは深刻な社会問題となっている。

(2) 「素質教育」が中国にもたらしたもの

天野一哉 (2013) によれば中国の教育熱は 80 年代⁽⁶⁾に始まるという。改革開放以来、中国の教育熱は「応試教育」によって支えられていた。「応試教育」というのは学校と教師による「知識の詰め込みと丸暗記」教育である。21 世紀を迎えるにあたり創造力豊かな人材育成が急務となったために、1999 年以降「素質教育」に教育政策を転換することになった (田中 2013)。この「素質教育」というのは「道徳素質教育、知力・能力素質教育、心理素質教育、審美素質教育、身体素質教育、労働素質教育から構成された総合的な概念」(前掲田中 2013: 43) とされ、子どもの全面的な能力開発を促進する教育である。

「素質教育」は乳幼児から大学生までが対象となっている。そのため、幼児教育の重要性が一層喚起され、それが本論文で取り上げる早期教育の浸透を促した。一方大学においては高等教育改革が実施され、専門人材とエリートを育てるため、大学受験のためにはないがしろになりがちな創造性を

中心にした、部活・サークル活動、ボランティア活動などの実践活動が大学の単位認定されるようになった(張 2015: 52-53)。「素質教育」は「応試教育」の反省として新たな試みとして推進されたはずであるが、現在においてもなお大学受験は熾烈を極め、受験対策のための詰め込みかつ暗記型の教育がいまだに残存しているのも事実であり、大学に合格してもまた同様の競争が待っている⁽⁷⁾。それに加え、素質(日本では資質)という潜在的な能力を引き出し高めることを目的とした結果、中国の若者たちは胎教・乳幼児から大学生までと長きにわたり、激しい競争に巻き込まれることになった。素質教育のスタートラインとしての早期教育は非常に重要性を増し、中国全土において必要不可欠な「教育機関」⁽⁸⁾となっているのも必然の結果と言えよう。

4. 中国の幼児教育と「早期教育」の隆盛

(1) 中国の幼児教育の定義

中国の百度百科(オンライン百科事典)によれば、幼児教育には広義の意味と狭義の意味がある。広義の意味は、(乳)幼児の身体の成長、また、認知、感情、性格等の面に影響を与える特定の目的を持ったあらゆる活動を指す。例えば(乳)幼児は大人の管理のもとで、テレビを見たり、家でさまざまな行いをしたり、社会活動に参加したりすることもすべて幼児教育であると考えられている。一方、狭義の意味は、幼稚園とその他の専門的な幼児機関が行う教育を指している。つまり中国においての幼児教育は、広義の意味では家族構成員に限らず、さらに子育て全般を指すが、狭義では専門家による専門機関での教育活動を指すことになる。早期教育はまさに狭義の意味の中に含まれる。

(2) 中国における幼児教育の発展

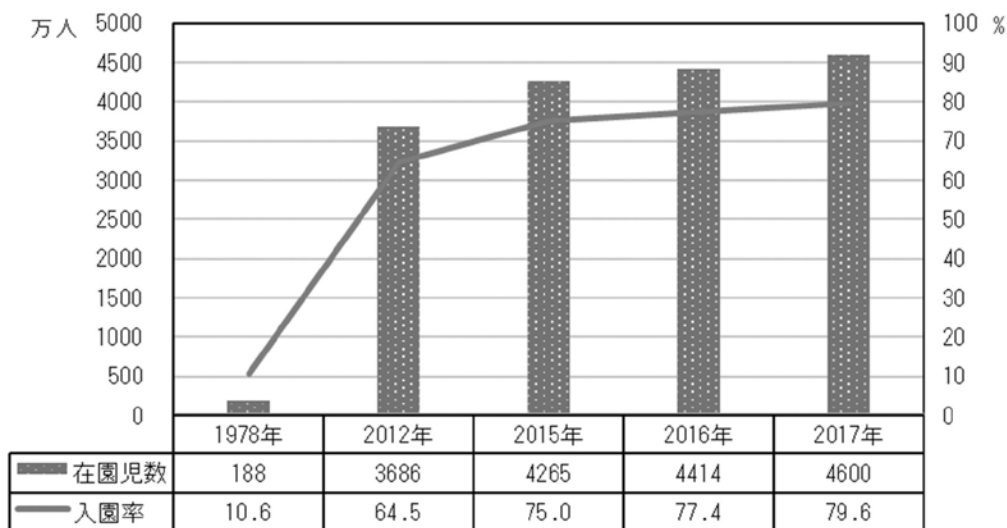
次に本項では中国における幼児教育の変遷を簡潔に説明しよう。呉遵民「論幼児教育の本質(幼児教育の本質)」(2018: 8-9)に依拠すれば、

・・・改革開放から現在に至るまで、幼児教育の復興期である。・・・2001年に公表された『幼稚園指導綱要(試行)』はさらに素質教育を強調し、児童の認知と感情の双方の発達を提唱している。2012年に、中国教育部は『3÷6歳児童学習と発展指南(3÷6歳までの児童の学習と発達マニュアル)』を公表し、その中でも、健康、言語、社会、科学、芸術という5つの分野において、幼児の学習と発達の基準を定め、発達段階に関して合理的な期待があるとされる。・・・(下線筆者)

以上より、中国幼児教育が本格的に発展を遂げたのは改革開放(1978年)以降であることが分かる。それ以後、幼児教育に関する公文書や施行条例を發布し、(行政が)幼稚園の活動に指導を行うようになった。特に2001年の幼稚園における素質教育の強調、2012年の教育部によるマニュアル化は中国の幼児教育を大きく発展させた。

中国の幼児教育における発展段階を示すデータがある。中国教育部が公表している幼稚園数のデータ(「2017年全国教育事業発展統計公報」)によれば、2017年において全国には幼稚園が延べ25万5,000ヶ所あり、前年より1万5,100ヶ所(6.31%)増設されている。また入園児人数は1,937万9,500人で、前年より15万8,700人(0.83%)増員、在園児人数は4,600万1,400人であり、前年より186万2,800人(4.22%)増加している。図1は在園児人数と入園率のデータである。

図 1. 1978 年、2012 年、2015-2017 年学前教育在園児と入園率



※出典 中華人民共和国教育部「1978 年、2012 年、2015-2017 年学前教育在園幼児和毛入園率」をもとに筆者作成

図 1 から分かるように、改革開放の 1978 年から 2017 年まで、在園児数は 24.47 倍、入園率は 7.51 倍増えていることになる。このデータから見ると改革開放以来、中国政府は幼児教育に対し大きな関心を払っていることが分かる。1978 年から 2012 年の約 34 年の変動は不明であるが、2012 年から 2017 年までの約 5 年間において在園児人数が 1.25 倍、入園率は 1.23 倍に増加し、入園率も約 80% まで上がっていることから、中国において幼稚園への通園⁹⁾は一般化されつつあることが分かる。

(3) 「早期教育 (早教)」とは何か？

中国で言う「早教」は「早期教育」の略称であり、90 年代になって中国に萌芽し、2000 年代以降、目覚ましい発展を遂げた新しい幼児教育のひとつである。日本でいう乳幼児を対象とした情操教育の教室や幼児教室に該当する。黄光琳 (2013) によれば、広義の意味における早期教育とは 0 -

6 歳の子どもが受ける教育を指すが、狭義の意味における早期教育は 0 - 3 歳の子ども (乳幼児) が対象となるという。早期教育の定義については下記のように述べている。

早期教育は児童の生理と心理の発達の特徴、及び敏感期における発達の特徴に従って、それに適した指導と訓練を行い、児童の多元的知能と健全な人格のために、良好な基礎を築き上げ、児童の潜在的能力の開発に特に力をいれ、児童の言語、智力、芸術、感情、人格と社会性などの面の全面的な発達を促進させることである。・・・0 - 3 歳は早期教育の黄金期であり、段階的な教育を通じ、この年齢層の児童の心理と智力の発達の特徴を明確にさせ、明確な目的を持ちながら教育を展開させれば、児童の智力と潜在力を開発させることができ、全面的な総合発達を促進させられるという考えにほとんどの人が賛成している。

要因となり、中国の早期教育機関はこの十何年の間で、雨後の筍のように、速い発展を遂げている。(黄光琳2013:120)(下線筆者)

中国では、黄金期と称される0-3歳までの乳幼児の全面的な潜在的能力開発を行う早期教育を好意的に受け止め、受容していることが分かる。また表1では、早期教育の「経営形態」、「経営方式」、「カリキュラム」について分類して説明されている。

実際の教室を例にとり早期教育を捉えてみることにしよう。全国80都市150か所にチェーン展開をしている「北京億嬰天使教育諮詢有限公司」のHP¹⁰⁾を参照すると、欧米や韓国、ユネスコの「起点教育(開端児童教育項目)」を結合させ、0-6歳の乳幼児に対し、中国の特性に合わせながらも外国の先進的な「科学的な知」に基づく教育を提供し、素質の高い人材の輩出、中国の経済・社会の持続可能な発展を掲げている。また主に乳幼児の脳開発、心身の発達に重きを置き、専門家の手による発達段階ごとのカリキュラムが組まれている。

まとめると中国における早期教育は、0-6歳までの乳幼児を対象とし、欧米の科学的理論に依拠しながら、潜在的能力(素質)を高めることを目的とした幼児教育の一つである。この教育ビジネスは、一人っ子の教育に対し非常に熱心な現代の親たち¹¹⁾がそれを受容しているため成り立っている。さらに前述したが、国家¹²⁾・市場・家庭3者が早期教育・幼児教育に対し大規模な投資を行っている。早期教育を含めた幼児教育市場拡大の要因を、2016年の時点では「一人っ子政策」の廃止による新生児の増加、家庭児童保育・教育費用の増加と国家の持続的な予算増額によるもの」としている(前掲、中国産業信息网2017『2017年中国早教幼教行業發展現狀及發展前景分析』)。改革開放以降に生まれた「80

后後(80年代生まれ)」、「90后後(90年代生まれ)」の親たちは、自身が先進的かつ科学的・合理的なものに触れて育っているため抵抗感がなく、かつ自身が熾烈な受験戦争をくぐり抜けてきたことより、乳幼児からの教育の重要性を身をもって知っているのである。

以上、現在、中国社会で生じている私的領域内でのジェンダー差、「素質教育」政策による子どもの教育の激化・長期化、早期教育の隆盛現象について言及した。次項では量的、及び質的調査両方によって家庭における父親の役割を明らかにしたい。

5. 分析方法

(1) 調査方法、及び調査対象者

次に筆者らが実施した事例研究の調査方法、調査対象地域、対象者について説明する。本研究において現代中国の父親が考える幼児教育・早期教育や子育て、家族観における基礎的状況を把握するために、アンケート調査¹³⁾とインタビュー調査の両方を実施した。

まず、手順としてはインタビュー調査を行い、父親たちが幼児教育や子育てにどのようにコミットしようとしているのかを捉えた。その後でインタビュー調査の結果からアンケート調査のための質問票を作成した。下記が、調査方法及び調査対象者に関する詳細である。

インタビュー調査：2018年1月12日～17日に大連市へ赴き、大連市高新技術産業園区(高新区)にある中国全土で展開している早期教育教室(0-6歳専業早期教育センター児童早期教育)に通う父親12名と、園長先生・先生2名に対し、半構造化インタビュー調査を行った。早期教育教室に通わせている父親たちの子ども観、

表 1. 早期教育における「経営形態」、「経営方式」、「カリキュラム」に関する分類

経営形態	1. 幼稚園を経営しながら0-3歳の乳幼児に対し教育理論など専門性を提供できる機関。
	2. 塾の延長線上にあり専門的な早期教育機関ではないが教育活動を行う。教師のレベル管理においては基礎的条件を完備している機関。
	3. コンサルティング会社などの名目で登録された機関。1と2のような専門的教育機関と違い、工商行政部門で登録すれば経営できる機関。
経営様式	1. 大規模型総合早期教育機関：設備などが非常に完備されており、全国に加盟制の教室を展開。
	2. 特色がある早期教育機関：音楽、美術、感覚統合など特定能力の開発を実施。
カリキュラム	1. モンテッソーリの理論をもとに感覚教具と数学の教具を使用し実施。少人数クラス制。
	2. 感覚統合とそのトレーニングの授業。感覚統合で発生する問題を有効的に予防し、神経系の発育促進を目的とする。
	3. 脳全体の開発を目的とした授業。主に脳全体の開発と右脳の開発と2種類がある。
	4. 言語発達を目的とした授業。ほとんどは外国人教師が英語を教えている。

※出典：劉霖芳 (2012)「我国早教機構發展中存在的問題和对策」から筆者が表を作成。

ジェンダー観、父親観、現在の中国の幼児教育をどのように捉えているのかについて質問した。

アンケート調査：2018年8月13～15日、大連市甘井子区にある私立幼稚園2園¹⁴⁾において252名の父親にアンケート調査をお願いし、回答は84名であった。今回のアンケート調査方法はウェブ上に質問票をアップロードする方法を採用した。その理由としては、現在中国においてスマートフォンが非常に普及しており、かつウェブ上のほうが仕事や子育て家事の合間に回答しやすいのではないかという意見を頂いたため、中国社会の状況に鑑みてこの方法を採用した。クラス担任の先生にお願いし、クラスの We Chat¹⁵⁾グループに調査の趣旨説明とQRコードを送信してもらった。調査票の質問項目は、幼児教育（早期教育）の実態、（幼児）教育観、子育て観・実態、家族観、及び性別役割分業規範についてである。

(2) 調査対象地域

本研究における対象地域は、中国遼寧省大連市を選定した。大連市の特色について言及する前に中国大連市¹⁶⁾を調査対象地域に選定した理由を述べる。同市は、共同研究者が大連外国語大学日本語学院に勤務しており、幼児教育機関にネットワークを有しているため調査協力をお願いしやすいという利点¹⁷⁾があったからである。大連市政府のHP¹⁸⁾を参照にすると、大連市の総面積は12,574平方キロメートルであり、戸籍人口が595.63万人である。

2017年のデータでは、大連市の都市部在住の平均年収は38,050元¹⁹⁾であり、前年比6%増である。一人あたり消費支出は27,119元/年で、前年より5%増えている。一方、農村地域の年収は15,664元であり、前年比6.8%増である。一人あたりの年消費支出は10,038元であり前年より6.3%増えている。

また2017年大連市政府教育局²⁰⁾のデー

タに依拠すると、大連市には幼稚園が1,326園あり、在園数は169,029人となっている。

6. 分析結果①－父親アンケート調査

まず属性について説明すると、平均年齢は父親が35.4歳で、妻の平均年齢は34.6歳である。表2の父親の最終学歴を見ると半数以上が大卒であり、大学院卒も16.7%いることから、大卒以上が約7割に達し高学歴であることが分かる。次に職業については、国家機関・党組織・企業25名(29.8%)、専門技術職11名(13.1%)、事務職関連4名(4.8%)、販売・サービス業19名(22.6%)、農林牧水産業が1名(1.2%)、生産設備の運搬・操作1名(1.2%)、軍人2名(2.4%)、その他21名(25.0%)となっている。また就業形態に関しては、正社員(おおむね定時退社)41名(48.8%)が半数で、次に自営業・家族企業従事21名(25.0%)が多い。

表2. 父親の最終学歴

	人(%)
小学校	1(1.2)
中学校	1(1.2)
高等学校	7(8.3)
専門学校・短期大学	17(20.2)
大学(4年制)	44(52.4)
大学院・大学(6年制)	14(16.7)
その他	0(0.0)
当てはまる人はいない	0(0.0)
合計	n=84(100)

表3. 早期教育に賛成・反対

	人(%)
非常に賛成	51(60.7)
賛成	25(29.8)
どちらともいえない	4(4.8)
反対	3(3.6)
非常に反対	1(1.2)
合計	n=84(100)

早期教育に通わせることに76名(90.5%)が賛成を示しており、実際に通わせているのは53名(63.1%)であった。

特筆すべきは、表4-1と表4-2である。子どもとふれあう時間について質問すると、平日でも1時間から2時間以内、休日なら約8割が2時間以上子どもと交流する時間²⁾を取っている。

また表5の性別役割分業規範についての回答であるが、88%が「父親も母親と育児を分担して、積極的に参加すべき」に回答しており、子育ての側面では性別役割分業規範はあまり見受けられない。次に表6で、具体的に未就学児の子どもに何をしていたのかを複数回答で質問している。遊び相手、お風呂、危ないことに対して注意する、寝かしつけ、本の読み聞かせ以外にも多岐にわたって子どもの生活、教育に関係することに関わっている。また教育にも積極的に

表 4-1. 子どもとふれあう時間 (平日)

	人 (%)
10 分以内	3(3.6)
30 分以内	4(4.8)
1 時間以内	11(13.1)
2 時間以内	25(29.8)
2 時間以上	41(48.8)
合計	n=84(100)

表 4-2. 子どもとふれあう時間 (休日)

	人 (%)
10 分以内	0(0.0)
30 分以内	1(1.2)
1 時間以内	3(3.6)
2 時間以内	13(15.5)
2 時間以上	67(79.8)
合計	n=84(100)

表 5. 性別役割分業規範と子育て

父親も母親と育児を分担して、積極的に参加すべき	74(88.1)
父親は許す範囲内で育児をすればよい	9(10.7)
父親は外で働き、母親が育児に専念すべき	1(1.2)
その他・わからない	0(0.0)
合計	n=84(100)

表 6. 未就学児に父親がしている (た) こと (複数)

	84名 (%)
お風呂に入れる	68(81.0)
遊び相手をする	75(89.3)
おしめをかえる	61(72.6)
ミルクを飲ませたり、ご飯を食べさせたりする	59(70.2)
寝かしつける	63(75.0)
幼稚園・教室などの送迎	58(69.0)
絵本を読み聞かせる	61(72.6)
母語や外国語を教える	38(45.2)
体操をする	20(23.8)
危ないことやしてはいけないことに対して注意をする	66(78.6)
他の子どもの両親と積極的に交流する	38(45.2)
幼稚園や教室の先生・専門家と積極的に交流する	33(39.3)
その他	3(3.6)

関わっていると思っている父親が95%（表7）に上り、現代の父親たちは、子育て及び教育に非常に熱心に関わろうとしていることが分かる。

表7. 教育への積極度

	人(%)
積極的	51(60.7)
まあまあ積極的	29(34.5)
まあまあ消極的	2(2.4)
消極的	1(1.2)
分からない	1(1.2)
合計	n=84(100)

表8. インタビュー対象者（父親）の属性

NO.	年齢	学歴	現在の職業	本人/家庭年収	性別（子どもの数）・年齢	妻の年齢	現在の妻の就業有無
A	42	修士	IT関係のマネージャー	30万円	男の子（1名：3歳）	39	無職
B	36	専門学校卒	パソコン関連グローバル企業の市場部門	8万円/40万円	女の子（1名：2歳3か月）	37	有職
C	32	修士 （現在取得中）	IT会社経営	50万円/70万円	男の子（1名：1歳6か月）	32	有職
D	37	大卒	アメリカ企業の経理部	10万円/18万円	男の子（1名：3歳）	37	有職
E	28	大卒	地方銀行支店長	200万～300万円 （世帯年収）	女の子（1名：1歳10か月） 男の子（1名：7か月）	28	無職
F	35	大卒	パソコン関連グローバル企業社員	6万円/30万円	男の子（1名：3歳6か月）	35	有職
G	35	大卒	パソコン関連グローバル企業マネージャー	10万強/25万円	男の子（1名：3歳3か月）	35	有職
H	31	修士	食品加工自営業	非回答	男の子（1名：2歳6か月）	31	有職
I	31	大卒	ソフトウェア開発	12万円/20万円	男の子（1名：2歳近く）	34	有職
J	33	大卒	住宅構造検査技師	5～6万円（本人）	男の子（1名：2歳）	32	有職
K	35	大卒	建設デザイナー ※現在、専業主夫	15万円/30万円	女の子（1名：約3歳）	34	有職
M	35	大卒	幼児教育教室の水泳教師	約15万円（本人）	女の子（1名：9か月）	31	無職

6. 分析結果②—父親へのインタビュー調査

次に早期教育教室に実際通っている父親のインタビュー結果について分析する。表8がインタビューに答えてくれた12名の父親の属性である。

表8の属性を見て、特筆すべきは学歴と職業であろう。今回、調査に協力いただいた地域がテクノパークを有する高新園区であるため、世界でも名だたるグローバル企業、またはIT企業で働く父親が多く、年

収も大連市の平均より高い。また特殊な技能を取得しているためほとんどが大卒以上であり、さらには中国屈指の理工系大学を卒業している父親が多いのが特徴であった。妻に関しては、現在無職が12名中3名で、9名は有職である。

また表9を見ると、早期教育に通わせ始めたのが2、3か月とE(28歳)が一番早い。また、回数や同行を見ると、C、Dは平日にも通って（た）るが、全員が週末に同行している。実際に教室に参加するのは母親で、父親は送迎の役目を担い、教室の外

表 9. 早期教育に通い始めた年齢と同行回数

NO.	いつから早期教育に通っているか	早期教育に行く回数	早期教育にどれくらい同行しているか
A	約2歳6か月	週末2回(3つのクラス)	土1回 いつも同行し、教室に参加
B	無回答	週末1回	今はやめたが、以前は土1回いつも同行していた 母親は教室に参加、父親は外で待つ
C	1歳	週末1回 木曜日1回	週末1回
D	約6カ月	以前2回 幼稚園入園後、週末1回	今はやめたが、以前木1回土日1回 母親は教室に参加、父親は外で待つ
E	2、3カ月	2~3回	娘:金1回、土1回、息子:土1回 10回中3、4回は同行
F	8カ月	週末2回(3つのクラス)	土1回(クラス2つ) 母親は教室に入り、父親は外で待つ
G	約1歳	週末2回	今はやめたが、以前土1回或日1回、もしくは土日各1回 父母共に一緒に行って交代して教室に入る
H	1歳6か月	週末2回	日1回(クラス2つ) 一緒に行って、ひとつのクラスずつ参加
I	1歳6か月	週末1回	土1回 母親は教室に参加、父親は外で待つ
J	7、8カ月	週末1,2回	土1回(クラス二つ) 10回中、8回は同行
K	2歳	3歳以前2回 現、1回	土1回 母は教室に参加、たまに同行
M	6カ月	週2回	土1回 早期教育の教室に勤務

で待つと回答する父親 (B、D、F、I、K) もいるが、半分以上の父親は子どもと一緒に教室²³⁾に参加し、授業を受けている。

(1) 教育パパと教育肯定言説

このインタビューに協力した父親のほとんど (11名) は、積極的に子育てに関わっていること、教育熱心な父親であることに自負を持つ。B(36歳)は、自分のことを「スーパー教育パパ」であると自負している。

自分はスーパー教育パパだと思います。娘は帝王切開で生まれたので出産したあと妻は一時動けませんでした。基本自分ひとり

で娘の面倒を見ていました。もちろん一ヶ月間、月嫂²⁴⁾を雇いましたが、私も自ら積極的に月嫂が初めてオムツの替えるところに行って学び、その後すべてオムツを替えるのは基本私がしました。…(ミルクの作り方についても) どうやって温めるのか、どうやってあげるのか、どうやって片付けるのか、抱き方、冷まし方、それらはすべてできます。基本産褥の時は私がすべて子どもの世話をしました。

と述べたので、具体的に教育面で何かしているかを聞き直すと、ずっと一緒にいて遊び、娘を喜ばせているとことを述べた後、現在娘が質問するのが特別好きな時期であ

るので、ずっと「どうして？」という質問に対し真摯に答えることを行っているという。G (35歳) は、子どもが息子であることもあり、3歳以前は8~9割が子どもにとって母親が必要であるが、3歳以後は息子の活動量は多くなるため父親が母親に取って代わり8~9割父親が必要になると考えている。父親が必要になる時は青春以降であり、父親は息子の人生のモデルとしての役割があると述べる。早期教育などの教室に同行し、一緒に遊ぶことで信頼関係を構築させることがまず大事であり、信頼関係が構築できた後、子どもが(自分から)学ぶようになると考えている。A(42歳) は、自分の時間がないほど子育てや教育に熱心にコミットはしているが、なぜこのように自分の時間がないのに子どもの教育に関わるのかという問いに対して「(大きくなった時)一緒にいなければパパはいらない、そういうふう(思われる)思いがあります」と述べ、「パパはなんとか時間を探して、なるべく子どもと一緒に何かをやるべき、それが重要だと思います」と時間を作って父親として関わることに意義を感じている。B(36歳)と同様に、G(35歳)もA(42歳)も、早期教育に同行するだけではない。家庭では、本の読み聞かせを行ったり、時間を見つけて一緒に遊んだりご飯を食べさせたりしている。家事も行っている。彼らの考える教育とは、早期教育で学習するような脳開発や心身の発達にだけを意識しているわけではなく、子どもに関わる生活全般や自身が子どものロールモデルとなることを教育と捉えていることも分かった。

(2) 早期教育に通わせる理由

A(42歳)は、早期教育は重要だと思っており、妻から早期教育の情報を得て「3

歳の子どもは脳の形成が一番重要な」時期であると知り早期教育に通わせ始めた。また本やインターネットからの子どもの発達に関する情報を調べている。早期教育に行くことで知り合いもでき、WeChatで他の子どものお母さんと情報交流しながら勉強できる点も利点だと思っている。F(35歳)も、早期教育に早く通わせれば通わせるほどよいと答えている。その理由が「家にいると他の子どもと接触する機会がないですし、子どもが早期教育の授業を受けた後、自信を持ってほしいです。他の子どもと同様に言語や表現能力、またロジスティック能力もよくなる」からだという。また、早期教育を含めた教育は「投資」であると話した。「投資」と考えるからにはいずれ子どもから何か返ってくることを期待しているのかを聞いたところ、

返してほしいとは思っていません。私が考える投資は子どもが自分で自分のことができるようになること、自立できることです。息子が私たちに何か返してほしいとは思っていません。ただ、自分自身を養うことができ、幸せな生活が送ればそれでいいです。

と述べた。

彼らが早期教育に通わせる理由としては3点あると考えていることが分かる。1点目は、(早ければ早いほど)乳幼児において脳や心身の発達を促すことで才能を開花できる可能性があること。2点目は、才能が開花したら子どもの自信に繋がること、将来自立のために役立つこと。3点目は、通わなければ家で大人の中にひとりで居ることに対する心配、つまり幼稚園に通う前は子ども同士の交流がないこと、4点目は、親同士の情報交換の場、親も勉強する場で

あると考えているためである。

(3) 子どもが生まれてから働き方が変わる父親たち

インタビューに答えてくれた父親たち 12 名は、全員子どもが生まれてから生活、働き方が変わったと回答した。

J (33 歳) は、子どもが生まれてから自然と働き方が変わったという。すぐに帰宅するようになり普段から食事を作る。それを負担だとは思っておらず、親として子どもの成長をずっと見守っていることを当然のことだと捉えている。J のように教育熱心な父親は周りに多く (8 割) いると述べている。

また F (35 歳) も、子どもが生まれてから自分の時間がなくなったという。すべては子どものために時間を使っていると言うが、そのことに対して負担を感じてはいない。できるなら子どもが友人との世界をつくるまで、小学 3 年ごろになるくらいまで必要であったらずっと子どものそばにいると答える。

一方、逆に子どもが生まれて家族に不自由のない生活を送らせてあげたいという思いから、睡眠時間を削っても副業 (妻の実家の事業) を手伝いお金を稼ごうと考える父親もいる (E、28 歳)。E は、地方銀行の支店長ということもあり、多忙を極めなかなか早期教育に同行はできていないと言う。しかし「以前の中国のような母親が子育てを担っていた時代ではなく、現在の社会は父母と一緒に子どもを育てる時代である」と認知している。

(4) 早期教育において大事なものは「夫婦関係」

以上、父親のインタビュー結果をまとめたが、早期教育を実践している幼児教育者

側の意見は下記である。園長先生は、

・・・(この教室では) 主に講座の形式で親への教育について考えます。ほかには婚姻を主題とするミニ講座も開きます。なぜなら、家庭で一番重要なのは、親子関係ではなく夫婦関係だと思っているからです。・・・原家族は子どもに対する影響が一番大きいからです。家庭で夫婦関係がよくないと子どもの成長に影響をもたらすかもしれません。もし、子どもの成長過程で愛情やエネルギーなどを注いであげないと、子どもが成長したら (他者を) 愛することもできないと思います。(下線筆者)

と話す。通常は子どもの能力を高める授業を行っているが、それ以外に婚姻や夫婦関係についての講座も不定期に開催している。開講する理由として、家庭において親子関係よりも夫婦関係が重要だと思っているからである。その理由は夫婦関係が良好であるかどうか、結局子どもの成長に大きな影響をもたらすと考えているためである。早期教育機関の果たす役割は専門家による子どもの発達促進だけにとどまらず、保護者との関係を重視し保護者の良き相談者としての役割も果たしているという。

7. まとめと考察

今回の調査結果より、下記の 4 点が明らかとなった。

1 点目として、中国の父親は、積極的に子どもにコミットする。子どもに時間を割くことに対してあまり負担を感じてはいない。普段の家事を行うこと、子どもの寝かしつけや食事、おしめの取り換えなども行う。また性別役割分業には否定的であり、教育・子育ては夫婦一緒に行うものである

と捉えている。子どもが生まれて以降、子どもと過ごすために働き方を変える父親、忙しくても子どものために何とか時間を作る父親もおり、父親として家族、子どもの成長に携わることにあまり抵抗感がない。

2点目として、早期教育を行うことにも肯定的であり、「教育パパ」であることを肯定的に受け止めている。教育パパに意味付与されているのは、強制的に勉強をさせる父親のイメージではなく、彼らが考える教育パパは、子どもと一緒に遊び、生活をし、早期教育に同行し、子どものモデルとなり、子どもの将来を考えることを指す。そのため父親たちは教育熱心なパパであることに自負を持っている。また子育てと教育の境界線が曖昧であることも特徴であろう。

3点目として、早期教育を行うことには通わせるのが早ければ早いほど子どもの能力の開発になるとの考えがあるが、それだけではなく子どもが自信を持てること、自立できること、生きる力を持ってほしいという思いがあるためである。

4点目として、教育者側のインタビューより、早期教育において注視しているのは、親子関係ではなく夫婦関係であることも分かった。教育者側は、夫婦関係が家庭の基礎であり、夫婦関係に支障をきたすと子どもの成長に悪影響をもたらすと考えている。

子どもの年齢がまだ低く小学校前であること、父親の学歴も高いこと、調査対象地がかなり特徴的性格をもつ地方の中でも比較的大都市であることもあり、今回の調査結果を広く一般化はできないが、現段階においては、現代中国に「新しい父親」が誕生していると結論付けられるのではない。従前より中国では共働き社会であることから、家事や子育てを行うことに対し

中国の男性（父親）は日本ほど抵抗感がないことは言われていた。しかし今回の調査で明らかになったのは、従前の父親役割に新たに「乳幼児への教育」が付与されている点である。無論、乳幼児に対する教育というのは子育て領域と重複するであろう。だが素質教育に基づく乳幼児の潜在能力の開発を行う早期教育は、明らかに従前の中国の子育てにはなかったものである。改革開放が進み、市場経済が進行した中で生まれた「80后後（80年代生まれ）」、「90后後（90年代生まれ）」の父親たちは「科学的知」を根拠とするそれを肯定的に必要なものとして受け入れ、子どもを早期教育に通わせている。父親の学歴も大きく起因していると推測されるが、現代中国社会に現れた「80后後（80年代生まれ）」、「90后後（90年代生まれ）」の、熾烈な受験戦争を勝ち抜き、小さいころから競争の中で過ごしてきた新たな父親たちは、仕事（稼ぎ）も、家事も子育ても、そして教育にも積極的にコミットしようとする。ある意味で彼らを「パーフェクト・ファザー（完璧な父親）」と称してもよいのではないだろうか。また教育は早ければ早いほどよいとスタートにこだわりつつも、早期教育に通うことが子どもの幸せや自立につながってほしいと願うところは、一人っ子として競争社会で生き抜いてきたからこそその願いなのではないか。

本稿では、現代中国において誕生し始めていた新たな父親像についてまとめた。この新たな父親像の出現は、宮坂靖子及び、鄭楊が論じた「専業主母」の出現や女性自身が有する性別役割分業規範の内面化と相反する現象ではないと考えている。むしろ筆者らは、現代中国においては、これらが同時並行的に起こっている現象であると捉えている。他の要因も多く含まれると思われる。

るが、主に市場経済と「素質教育（父母の教育歴・子どもに与えたい教育機会）」と、個人的要素である父母の経済力に依拠するジェンダー・バランスが、両者のどちらかを誕生させることにつながるのではないかと推測している。つまり、市場経済の流れの中で「素質教育」が商品化され拡販されることで、元来子どもの教育に熱心な中国においては教育の価値がより一層高まることに繋がる。特に「素質教育」の第一段階（「黄金期」）で子どもの人格形成に多大な影響を与えるとされる幼児教育（早期教育）は称揚され重視される傾向がある。市場経済によってそれを遂行できる専門機関（専門家）は誕生しているが、それだけでは「素質教育」政策は完遂できない。乳幼児が長い時間過ごす家庭内で、幼児教育を専門機関と共に執り行える家族成員が必要となってくるのである。家族成員の中で誰が子どもの教育のイニシアチブを取るのかに関しては、父母のジェンダー規範が大きく影響するであろう。ジェンダー規範のみならず、労働条件、祖父母サポート体制等の諸条件も含めて勘案し合意形成をはかった結果、「専業主母」か「パーフェクト・ファザー（完璧な父親）」、もしくはひとつの家庭内で「専業主母」と「パーフェクト・ファザー」の双方が誕生するのではないかと考察する。「専業主母」と「パーフェクト・ファザー」は、ひとつの家庭で二者択一の存在ではない点が中国の特徴であるかもしれない²⁴。

最後に課題として本論文の限界を明記しておく。本論文では中国の、地方都市 1 箇所のみが対象となっているため、父親像を相対化できているとは言い難い。さらに今回、都市部と農村部の教育格差に関しては、すでに多くの優れた中国の教育研究があるため、言及しなかった。しかし、近年中国において隆盛を誇る早期教育を取

り上げ、それが地方都市にも拡大・一般化していることを明らかにし、この早期教育を通して父親の役割、家族・ジェンダー観を探ろうと試みた点においては、意義のある研究であると考えている。

謝辞

本論文は、磯部香・黄一峰「日中における幼児教育とジェンダー—「教育家族」の中の父親役割—」（2018年2月14日於北九州市アジア女性交流・研究フォーラム中間報告）、磯部香・黄一峰「中国大連市における幼児教育の浸透と新しい父親像の出現」（2018年5月26日一般社団法人日本家政学会第70回大会、於日本女子大学）において報告したものに、大幅な修正を加え論文にまとめたものである。

この研究に際し、インタビュー調査にご協力くださった、大連市紅黄藍親子館の保護者の皆様、園長先生方、またアンケート調査にご協力くださった、大連市の私立幼稚園の保護者の皆様、副園長先生、そして中国の早期教育実情をいつもご教示くださる白燕先生（北京億嬰天使教育諮詢有限公司総経理）にこの場をお借りして深謝申し上げます。

なお、共著者である黄一峰氏には、主に4章、5章（2）の分担執筆、属性の整理・作成、中国における子育て、幼児教育等に関する統計資料収集を行ってもらった。

注

- (1) 『平成 29 年版高齢社会白書』によれば、高齢化率が 7% から 14% になるスピードは、日本は 25 年（1970 年から 1994 年）であったが、中国は 23 年（2002 年から 2025 年）と日本よりも早く高齢化が進行するという試算が出ており、中国においても少子化と高齢化は克服

- すべき大変大きな課題となっている。
- (2) 「中国「二人っ子政策」はや効果薄れ 出生数減少」(『日本経済新聞』2018年1月22日) <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO-25987180S8A120C1EA2000/> (2018年8月25日アクセス) そのため、現在「二人っ子政策」を廃止する可能性も出てきている(『AFP BB NEWS』「中国、二人っ子政策廃止の可能性 国営紙が示唆」http://www.afpbb.com/articles/-/3187431?cx_part=search (2018年8月28日アクセス))。
 - (3) 『中国家庭 教育消費白皮書』(2017) は有効回答票 51,973名と中国全国で実施された大規模 Web 調査である(新浪教育・新浪微博数据中心 2017)。<http://data.weibo.com/report/report-Detail?id=373> (2018年8月25日アクセス)
 - (4) 前掲、新浪教育・新浪微博数据中心『中国家庭 教育消費白皮書』(2017)。
 - (5) 中国も少子化が顕著であるが、日本の大学入試センター試験に相当する「全国大学統一入試(通称: 高考)」は年々熾烈を極め、これによって人生が決まると言われている。中国の若者たちは「高考」で良い点数を取り偏差値の高い大学に行くため、毎日勉強漬けの日々を送っている。
 - (6) 80年代の教育熱の勃興を、50年代から60年代において「文化大革命」の影響で学べなかった若者が80年代に親となり、自分の子どもに教育を受けさせたいという強い欲求に起因していると考えている(天野 2013: 23)。
 - (7) 「2017年全国教育事業発展統計公報」によると、全国の高等教育(大学院、一般大学、一般専門学校、成人大学と専門学校、インターネット大学、専門学校、高等教育独学試験の大学と専門学校などが含まれる)の在学者数は3,779万人であり、入学率は45.7%となっている。・・・世界一流大学(42校)と一流学科(95校)は合わせると137校であり・・・保護者たちが目指しているのは世界一流大学であり、保護者たちはトップクラスの大学、あるいは一流の学科に入らないと(子どもが)エリートになれないと考えている(中華人民共和国教育部(2017年9月21日「教育部 財政部 国家発展改革委關於公布世界一流大学和一流学科建设高校及建設学科名单的通知」)。http://www.moe.gov.cn/srcsite/A22/moe_843/201709/t20170921_314942.html (2018年8月29日アクセス) また筆者は大連市にある大学の教員であったため、大学生になってもレースから降りることができず、疲弊しながらも勉学に励む学生たちの様子を目の当たりにしてきている。
 - (8) 「早期教育が「教育機関」となっている」論拠に関しては次章参照のこと。
 - (9) 本論文では詳細は述べられないが筆者らは大連市にある幼稚園(2園)を訪問している。園長先生や先生に対し、保護者が幼稚園に期待しているもの、幼児教育に対する考え等についてインタビューさせていただいている。昨今の保護者は幼稚園に対しての要求は厳しいものになっているという。地域や保護者の学歴によっても要求に内容は違うであろうが、子どもの心身の発達や健康、幼稚園生活を含めた日々の幸せを願うだけではなく、小学校入学前の準備段階として勉強を求めている保護者も多いとのことであった。
 - (10) 北京億嬰天使教育諮詢有限公司 HP <http://www.yytszaojiao.cn/info.asp?id=1> (2018年8月30日アクセス) この教室は中国全土で第5位を誇る早期教育教室であり幼稚園経営も行っている。2009年より中国の乳幼児に適合するEBSP (Education best start of project) 教育体系を構築している。この北京億嬰天使教育諮詢有限公司を取り上げた理由としては、筆者自身がこの企業の主催による「国際児童オリンピック脳力錦標賽(国際児童脳力オリンピック)」に毎年審査員として参加しているため、この企業の早期教育法を比較的理解しているためである。
 - (11) 0-3歳の乳幼児への早期教育・幼児教育に

- 関する平均支出は平均 3,000 元 / 年、4 - 6 歳になると平均 5,000 元 / 年である (前掲、中国産業信息网 2017 『2017 年中国早教幼教行業發展現狀及發展前景分析』)。
- (12) 国家による早期教育・幼児教育に割く予算は (前年比) 15.48% 増加しており、教育予算全体の (前年比) 増加 7.57% と比べても 2 倍以上上回っている (前掲、中国産業信息网 2017 『2017 年中国早教幼教行業發展現狀及發展前景分析』)。国を挙げて幼児教育を推進していることが分かる。
- (13) アンケート調査は不特定多数の方にご協力願うため、研究課題名「日中における幼児教育とジェンダー—「教育家族」の中の父親役割—」にて奈良女子大学研究倫理審査委員会に申請を行った。平成 30 年 8 月 6 日付けで承認 (承認番号 18-10 号) を得ている。
- (14) 今回数園に調査依頼をしたが諸事情によりご協力いただけたのは 2 園のみとなった。
- (15) We Chat (微信) とは中国の IT 企業テンセント (騰訊) が作った SNS である。日本で使用されている LINE と類似しており、中国では多くの人が We Chat (微信) を使用している。幼稚園のみならず小学校、早期教育の教育機関でも積極的に活用されており、教師が直接保護者に連絡を取る手段として一般化している。
- (16) 大連市は 1979 年以来北九州市と友好都市関係にある。中国東北部の遼東半島の最南端に位置している。中国国内のみならず、世界各国をつなぐ重要な拠点として貿易・工業・観光が盛んな都市である。
- (17) 中国調査を遂行するためには、従前からある程度、信頼関係が構築されたネットワークがあるかどうか非常に重要なポイントとなってくるため、今回はランダムサンプリング方式を採用していない。調査地や調査機関及び対象者の選定に偏りがあることをここに明記しておく。
- (18) 大連市は観光都市として「東洋のパリ」、「北海の真珠」と称され、近代より日本と非常に縁が深い都市である。大連市政府日本語 HP <http://jp.dl.gov.cn/> (2018 年 8 月 25 日アクセス)
- (19) 全国平均収入は一人あたり 25,974 元であり、消費支出は 18,322 元となっている (国家統計局「中華人民共和国 2017 年国民經濟和社会發展統計公報」2018 年 2 月 28 日 http://www.stats.gov.cn/tjsj/zxfb/201802/t20180228_1585631.html (2018 年 8 月 30 日アクセス))
- (20) 大連市政府教育局 HP 「2017 年大連市幼稚園概況」2018 年 3 月 29 日 http://www.edu.dl.gov.cn/info/398627_1447872_vm (2018 年 8 月 30 日アクセス)
- (21) 『平成 30 年度少子化白書』「6 歳未満の子供を持つ夫婦の家事・育児関連時間」によると、男性の家事・育児時間が 1 時間 23 分 (妻: 7 時間 34 分)、そのうち育児時間が 49 分 (3 時間 45 分) となり、世界最低水準となっている。
- (22) 規定で教室には子どもと保護者 1 名しか参加できないことになっている。そのため、授業が終わるまで教室の外で待機している保護者の姿が多く見受けられた。
- (23) 「月嫂 (ユエサオ)」とは産褥間、産婦と新生児の世話をする専門の家政婦のこと。産婦の食事を作り、哺乳方法を指導し、赤ちゃんの世話をする 24 時間の産褥シッターである。(大和総研・大和総研ビジネス・イノベーション HP「超人気の中国「月嫂」」2012 年 6 月 21 日)
- (24) ここで注意せねばならないのが「パーフェクト・ファザー」は「専業主夫」ではないことである。インタビュー調査において「K」1 名が、現在専業主夫であると答えたが、建築デザイナーとしての収入がある。依然として稼ぎ手としての男性規範は根強くある。

参考文献

- 天野一哉 (2013) 『中国はなぜ「学力世界一」になれたのか』中央公論社。
- 落合恵美子 (2004) 『21 世紀家族へ—家族の戦後

- 体制の見かた・越えかた一』有斐閣選書。
- 吳遵民 (2018) 「論幼児教育的本質」『新疆師範大学学報 (哲学社会科学版)』新疆師範大学。
- 黄光琳 (2013) 「当前中国“早教熱”的社会学阐释」『前沿』内蒙古社会科学联合会、120。
- 田中圭治郎 (2013) 「中国における教育課題と展望」『佛教大学教育学部論集』第 24 号、35-51。
- 中国教育部網站 (2018) 『2017 年 全国教育事業發展統計公報』教育部。
- 張任 (2015) 「中国に於ける大学のキャリア教育の展開に関する考察—素質教育の補助と延長という視点から—」『東アジア研究』(13)、45-73。
- 鄭楊 (2016) 「市場經濟の轉換期を生きる中国女性の性別規範—3 都市主婦のインタビューを通して落合恵美子・赤枝香奈子編『アジア女性と親密性の労働』京都大学学術出版会、153-174。
- 宮坂靖子 (2007) 「中国の育児—ジェンダーと親族ネットワークを中心に—」落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編『アジアの家族とジェンダー』勁草書房、100-120。
- (2015) 「「專業母」規範の日中比較—中国・大連におけるインタビュー調査をもとに—」『総合研究所所報』第 23 号、69-84。
- 劉霖芳 (2013) 「我国早教機構發展中存在的問題和对策」『教育探索』黑龍江省教育科学研究院、138-139。
- 楊春華 (2018) 『中国における「一人っ子」の家庭教育の特質—親の教育意識構造をめぐって—』青山社。
- 日本經濟新聞「中国「二人っ子政策」はや効果薄れ 出生数減少」(2018 年 1 月 22 日) <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO25987180S8A120C1EA2000/> (2018 年 8 月 25 日アクセス)
- 新浪教育・新浪微博数据中心 (2017) 『中国家庭 教育消費白皮書』<http://data.weibo.com/report/reportDetail?id=373> (2018 年 8 月 25 日アクセス)
- 大連市政府教育局 2018 年 3 月 29 日「2017 年大連市幼稚園概況」http://www.edu.dl.gov.cn/info/398627_1447872.vm (2018 年 8 月 30 日アクセス)
- 中華人民共和國教育部 (2017 年 9 月 21 日「教育部 財政部 國家發展改革委關於公布世界一流大学和一流學科建設高校及建設學科名單的通知」)。http://www.moe.gov.cn/srcsite/A22/moe_843/201709/t20170921_314942.html (2018 年 8 月 29 日アクセス)
- (2018 年 7 月 19 日「2017 年全国教育事業發展統計公報」) http://www.moe.gov.cn/jub_sjzl_fztjgb/20180719_343508.html?authkey=nxe9j2 (2018 年 8 月 29 日アクセス)
- 中国產業信息網 (2017) 『2017 年中国早教幼教行業發展現狀及發展前景分析』<https://www.chyxx.com/industry/201801/609272.html> (2018 年 8 月 30 日アクセス)
- 北京億嬰天使教育諮詢有限公司 HP <http://www.yytszaojiao.cn/info.asp?id=1> (2018 年 8 月 30 日アクセス)
- 〈注記〉本論文は研究本体のテーマに関わり、「KFAW 調査研究報告書」(VOL 2018-2) で詳述する調査結果の一部を検討・分析し、同テーマの基で「研究論文」として執筆したものである。